

『鹿の王』日本医療小説大賞 受賞記念対談

作家・文化人類学者
上橋菜穂子さん

日本医師会会長
横倉義武さん

謎のウイルスによる感染症の拡大を防ぐべく奮闘する医師が登場する、
上橋菜穂子さんの長編小説『鹿の王』が
第4回日本医療小説大賞(日本医師会主催)を受賞した。
それを記念して、上橋菜穂子さんと日本医師会会長の横倉義武さんが、
『鹿の王』で描かれる命を守る闘い、また日本の医療のあるべき姿について、語り合った。

人の体は細菌やウイルスの共生体

上橋 『鹿の王』は物語を楽しんでいただきたくて書いたものですが、日本医療小説大賞のような意義ある賞をいただき驚いています。

横倉 本賞は医療への国民の理解と共感を深めていただきたいという思いで2011年に創設しました。医師以外の方が執筆した作品の受賞は初めてです。『鹿の王』はスケールが壮大で理屈抜きに読んで楽しい作品です。同時に感染症や免疫、ワクチンのことなどが非常に分かりやすい例えで描かれています。

上橋 この作品を書く前に医学や免疫、ウイルスや細菌の本を読んでも面白かったです。私たちの体は膨大な細菌やウイルスの共生体で、構成要素は常に入れ替わり、変化しています。自分の体のなかで一体何が起きているのか。そんな興味がこの物語を書く一つのきっかけでした。

は現代の科学でも解明できないところがたくさんあります。医療や治療の常識も時代とともに変わっています。

上橋 抗生物質の発明で感染症を撲滅できると思っていたら、抗生物質は人間に有益な菌まで殺してしまうことが分かってきた、なんてこともありますね。

横倉 医療の最先端の話をやさしく、分かりやすく書くのはとても難しいことだと思います。

上橋 今回はなるべく医学用語を使わず書くようにしましたが、間違った知識を読者に与えてはいけないので、内科医のいごに監修をお願いしました。

神の采配、運命を感じる医師の仕事

横倉 私が印象的だったのは、無理な治療はせず魂の救済を目指す宮廷医師と、西洋医学的に病気の原因を突き止めてどこを治療しようとする主人公ホッサルの対立です。江戸末期の漢方医と西洋医学のあつれきを思い出しました。

上橋 それは素晴らしいことですね。今、とても良い医師たちに家族を助けていただいています。良い医師は病だけでなく、心も救ってくださいます。

横倉 医療は人と人との間で行われるなりわいです。患者さん一人ひとりと向き合い、人間として寄り添うことが大切です。

上橋 私は医師ほど人の運命、神の采配を日常的に感じざるを得ない職業はないのではないかと思います。人は最後は必ず何かしらの病で亡くなっていくはかない存在です。それでもそんな悲しみを背負ってもがいている人の助けをしたい。ホッサルが医師になった気持ちも、小説のなかでそう書きました。

横倉 よく分かります。医師は一人でも多くの命を救おうと常に全力を尽くしますが、同じ手術をしても元気になる方がいれば、亡くなってしまいう方もいます。ところでホッサルが新しい治療法について説明し、どの治療法を選択するか患者側に聞くシーンがありますが、あれはまさにインフォームドコンセントですね。

上橋 医療については、専門家である医師に委ねざるを得ない部分もありますが、自分の命のことで自分ですという気持ちも大切だと思います。病気や治療法を患者に分かりやすく教えるという医療者側の努力と、自ら学ぶ患者

命を守る闘い、医療のこれから

側の努力、両方が必要だと思っております。

横倉 医療や健康に関しての正しい情報をきちんとお届けすることは、医師会としても大きな課題です。私どもが以前から取り組んできた市民公開講座などの活動も、今後ますます重要になってくると思います。

上橋 今はネットやメディアでの情報が豊富ですが、正確な情報を選ぶのが難しいですね。情報におどらされてしまうこともありません。高齢者になるほど情報弱者になりがちなので、そこを支える仕組みが必要だと思います。

かかりつけ医を核に健康寿命を伸ばす

横倉 これからは元気に生きられる健康寿命を伸ばすこと、そのための予防医学が重要です。

上橋 本格的に病む手前で引き返せたら、これに勝つことはありませんね。一点の曇りもない全き健康など幻想で、どこか具合が悪いくらいのところがあって当たり前なので

よう。その不具合に命をとりわけず、なるべく苦しまず、不具合と折り合いをつけて生きていくという考え方も大切であるような気がします。

横倉 高齢化が進むなか、住み慣れた地域で安心して暮らしていくには、医療、介護だけではなく幅広い分野の人々の協力が必要です。その中心的な役割を果たせるのが、かかりつけ医です。みなさんにはぜひ自分の体も健康、病気について気軽に相談できる、かかりつけ医をもっていたいただきたいと思えます。

上橋 病にはその人の生活環境や習慣、家族や仕事、人間関係など様々なものが関わっていますし、「地域のお医者さん」は、そういった病の背後にあるものまで視野に入れられる可能性があって、そういう意味でも重要な存在ですね。

横倉 まずかかりつけ医が診断し、そのうえで専門の医師につなぐ連携が地域でつくられてきています。

“誰もが良質な医療を受けられて安心できる社会を目指しています”



日本医師会会長
横倉義武さん

よこくら よしたけ / 1944年生まれ。69年久留米大学医学部卒業。西ドイツへの留学、医療法人弘恵会ヨコクラ病院理事長・院長、福岡県医師会会長などを経て2012年に日本医師会会長に就任。

“体のなかで何が起きているのかその興味が物語の始まりでした”



作家・文化人類学者
上橋菜穂子さん

うえはし なほこ / 1989年『精霊の木』で作家デビュー。著書に『精霊の守り人』をはじめとする『守り人』シリーズ、『獣の奏者』シリーズなどがある。川村学園女子大学特任教授。小さなノーベル賞といわれる国際アンデルセン賞、本屋大賞など受賞多数。

